

# 第十一章 アムステルダム・ケルン

## 一 国境を越えアムステルダムへ

スイスから次の目的地のアムステルダムを目指したが、ルートの記憶が不確かである。おそらく西ドイツを経由しないとアムステルダムには行けないと思うが、スイスと西ドイツ間の国境か、西ドイツとオランダ間の国境か、真夜中、起こされた。そして、リュクサククの中を徹底的に調べられた。ここでも、日本赤軍事件が関係しているように思われた。そういうこともあったが、無事、朝方、アムステルダムに着いた。

駅前の広場から空を見上げると、これまでの空と異なり、冬の日本海側のような雲がかなり北に來たと感じられた。駅前では、名物のニシンの酢漬けを売っており、早速一匹買って食べた。なかなかの味であり日本の食べ物が思い出された。

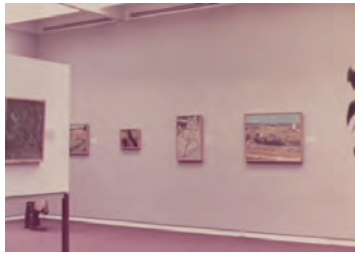
## 二 街中とゴッホ美術館

有名な運河の風景やチューリップの花を搜した。運河の風景は至るところで見られたが、チューリップは、着いた直後はなかなか見つけられなかった。アムステルダムは大きな街で観光に値する場所はたくさんあるが、『ゴッホ美術館』を目指した。大きく、立派な建物であった。『ひまわり』など有名な絵がたくさんあった。ゴッホの絵については、「有名な作品をこの目で観た」といった程度の感想であった。情けないが、写実的な作品以外の鑑賞能力は私にはない。チューリップは、公園などに入ると多く咲いていた。その他、運河を跨ぐ「跳ね橋」なども多く見られた。

今思えば、アムステルダムには「アムステルダム国立美術館」「レンブラントの家」「アンネ・フランクの家」「各種公園・動植物園」等々、多くの見どころがある。これらは訪問できなかった。南ヨーロッパと異なり、街全体の雰囲気は緯度が高いせいから少し暗いように思われた。また、人々の背丈がものすごく大きいと感じ、南ヨーロッパを懐かしく感じた。



アムステルダム (運河を中心に描いた)



ゴッホ美術館



アムステルダムの運河



公園のチューリップ



運河に架かる跳ね橋

1 アンネの日記は読んでいなかった。この家にも関心がなかった。ユダヤ人迫害の歴史についても当時は知識も乏しかった。最近、怖くて読めなかったフランクの『夜と霧』が読めた。読むべき本と言える本だと思う。しかし、このユダヤ人の問題が現在のハマス・イスラエル戦争と繋がっていると思うと複雑である。

### 三 飾り窓の女とポルノ映画館

オランダには公娼制度があり飾り窓の女という場所があるのは、当時も有名であった。見物するとしても夜が妥当かも知れないが、夜の街は少し怖いので、昼間に捜してみた。手元の地図ではよく分からなかったので、近い場所と思われるところまで行き、通行人に尋ねたらかなり変な対応———というか軽蔑しているような対応をされ恥ずかしかった。それでもくじけず、それらしい場所を見つけ写真を撮った。

当時、「フリーセックス」は北欧の代名詞のように思っていたので、気恥ずかしいが、夜———夜は出歩かないようにしていたが珍しく外出した———ポルノ映画を観に行った。映画のタイトルや内容は分からず、それらしい映画館に入った。シートに座り画面に集中していると、隣に大きな西洋人の男が座った。しばらくすると、座り方を変え私の足にその男の足が触れた。最初は、体が大きいのでやむを得ないと思っただけで我慢していたら、さらに足をこすり付けてきた。これはおかしい、ひよつとするとホモかとも思えだした。やはり不自然である。私は、足と体で大きく相手を押して強く拒絶したところ、男は座席から立ち去った。

それ以上、大きな問題にならずに良かった。ちよつとした事件であり暗くて人相などは分かなかったが、今でもよく覚えている。みなさま、一人でのポルノ映画鑑賞時にご用心を！ と言っても一人でのポルノ映画鑑賞の時代は過ぎ去ってしまったか。



飾り窓があった地区（SEXSHOPの看板が見える）

#### 四 ケルン

オランダから北の北欧は、物価が高いとのことであった。それと予定の日数もお金も少なくなってきたので、北欧は断念し、アムステルダムから最終目的地のパリを目指したが、ケルンで途中下車した。当時、ドイツの街にはあまり関心がなかったが、パリへの経路にケルンがあったので寄ったという程度だった。観光名所はケルン大聖堂であり、そこを目指した。

また、お土産に「ゾーリンゲン製の包丁」を買いたいと思っていたので必死に探したが、中々見つけられなかった。ようやく小さな店を見つけ、あまり上等とは思えなかったが買った。



ケルン

さあ、いよいよパリだ。